

ジェブツンダンバ一世伝説の成立

——十七世紀ハルハ・モンゴルの清朝帰属に関連して——

宮脇 淳子

はじめに

過ぐる十四年前、本『東洋學報』第六十一卷第一・二號誌上に、拙論「十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル」を掲載した。京都大学における卒業論文及び大阪大学における修士論文の研究結果をまとめた右の論文で、筆者は旧来の説の誤りを指摘した。

わが国の通説では、一六八八（康熙二十七年）年、オイラットのジューンガル部長ガルダン・ボシヨクト・ハーンがハルハ・モンゴルに侵攻した時、ハルハの王公は大会議を開き、席上ロシアに依るべきか清朝に依るべきかを議論したが、大ラマ・ジェブツンダンバ・ホトクトが、ロシアは仏教を奉ぜず風俗も異なるに反し、清朝は仏教を崇敬するので我々はこれに依るべきであると主張して、ついに清朝の保護を請うたと言われてきた。しかし、『清朝實録』や『親征平定朔漢方略』を見る限り、ガルダンの侵入時にハルハでは王公大会議を開く余裕などな

く、ジュンガルの大軍に隔てられたハルハの人々は、各自算を乱して逃亡し、清朝の保護を求めたのであった。一六九一年、亡命中の内モンゴルのドロン・ノールの地で、ハルハ諸侯が清の康熙帝に臣従を誓った後、康熙帝の命により、ジェブツンダンバ・ホトクトはハルハ随一の大ラマの位に就いたのである。

筆者が右の拙論を発表した当時、概説はともかく、清朝時代のハルハ・モンゴル史に関する専門的研究は、皆無と言ってもよい状況にあった。その概説はと言えば、『聖武記』（一八四二年著）や『蒙古游牧記』（一八五九年著）など十九世紀半ばに著された漢文の概説書に依つて、十七世紀に遡るモンゴルの牧地の境域を論じ、あるいは一九一一年にジェブツンダンバ・ホトクト八世を推戴して清から独立宣言を行った後の、中華民国時代の「外蒙古」ハルハの状況を十七世紀の清朝帰属時に投影したものであった。

筆者は、ジェブツンダンバ・ホトクト一世に関する伝承が後世の創作であることを立証するとともに、ハルハが三ハーン部に分割統治される（後に一部増えて四部になる）のも一六九一年の清朝帰属以後で、ガルダンが侵攻する以前のハルハ・モンゴルは左右翼に分かれていたことを、右の拙論で論証した。

その後、わが国における清代のハルハ・モンゴル史研究は、質量ともに大いに進歩を遂げた。森川哲雄氏、二本博史氏、岡洋樹氏、柳澤明氏、萩原守氏の諸論文が次々と刊行されたばかりでなく、島田正郎博士のモンゴル法に関する大著も、何点も刊行された。^② 当時の露清関係についても、吉田金一氏の労作が世に出た。^③ 筆者が将来の課題とした問題について明快な解答を提出する論著も現れ、まことに喜ばしい限りである。

ハルハ・モンゴルは、一九二四年から一九九二年までモンゴル人民共和国と称した現モンゴル国の前身である。

清朝が倒れた一九一一年から一九二四年まで、途中一時的な断絶はあったが、ボグド・ゲゲーンすなわちジェブツンダンバ・ホトクト八世がハルハ・モンゴルの元首の地位にあった。その初代から八世まで転生したジェブツンダンバ・ホトクトと清朝時代のハルハ史研究は、社会主義を放棄し、自らの歴史の見直しを始めたモンゴル国にとって、ナショナル・アイデンティティの根拠として、いまや最重要課題となっていると言っても過言ではない。

本論は、先の拙論以後大いに進歩を遂げたわが国のハルハ史研究の成果を利用しながら、かつては推測にとどめたジェブツンダンバ一世伝説の成立過程について論じることを目的とする。論旨がいささかなりとも進捗し得たのは、チベット語で書かれた著作年代の異なるジェブツンダンバ・ホトクトの伝記数種が、一九八一、八二年にSata-Djakaシリーズから刊行されて利用可能になったからである。三年間チベット語文献解読を御指導戴き、グライラマ五世伝など難解な高僧伝中の重要な記事を御教示下さった山口瑞鳳博士に、この場を借りて御礼申し上げる。

一、ハルハ・モンゴルの起源

十六世紀の初めにモンゴルの統一を回復したチンギス・ハーンの後裔ダヤン・ハーンは、元朝にゆかりのあったモンゴル系諸集団を六万戸に再編成した。万戸（トゥメン）とは、元来二万の兵を供出できる遊牧集団の単位であるが、この頃には、様々な遊牧集団をまとめた上位集団の呼称として使用されている。その六万戸とは、左

翼がチャハル、ハルハ、ウリヤンハン、右翼がオールドス、トメト、ヨンシエアであつた。いまのモンゴル国の人々の祖先である左翼のハルハ万户は、その名はホロンポイル地方を流れるハルハ河から出て、帝国時代の左翼五投下、ジャライル国王の所管の後身であつた。⁽⁴⁾

ウリヤンハン万户は、ダヤン・ハーンの死後十六世紀前半に反乱を起こしたため解体されて、その一部はハルハ万户に吸収された。⁽⁵⁾ ウリヤンハンの名称は古くから知られ、ケンテイ山中のチンギス・ハーンの墓を守つたウリヤンハン千戸の後身であると思われる。ウリヤンハン万户が遊牧していた漠北の中央部には、十六世紀中頃にハルハ万户が東から来て広がつた。ハルハ万户の下位集団となつたウリヤンハンはいまのトゥワに移住したため、清朝時代にトゥワの住民をタンヌ・ウリヤンハイ（唐努烏梁海ニタンヌ山脈のウリヤンハイ）と呼んだのである。

ダヤン・ハーンとマンドホイ・ハトンの間に生まれた七人の男子は、各万户の有力部族に婿入りし、万户長に迎えられた。ダヤン・ハーンの末子ゲレセンジェはハルハ万户に婿入りし、ジャライルの皇太子と呼ばれた。かれの二人の妻はオジエトとウリヤンハン出身であつた。ゲレセンジェには七人の息子があつたので、漠南に残つた五オトク・ハルハ（バーリン、ジャルトの前身）と区別するために、漠北のハルハを七旗ハルハと呼ぶようになるが、この時七旗ハルハは十三の下位集団（オトク）で構成されていた。また、七人の息子のうち六人だけが子孫を残したので、ハルハが実際に七旗に分かれて統治されたことはない。⁽⁶⁾

ゲレセンジェの息子たちはそれぞれオトクを分割相続し、その子孫もまたオトクの領民を分割相続した。十七

世紀初めのハルハには、グヤン・ハーンの子孫（すなわちチンギス・ハーンの子孫）の多くの王侯（ノヤン）がいた。ハルハの各王侯は、左右翼に分かれてそれぞれ盟主に従っていた。ゲレセンジュの長子の直系の子孫がジャサクト（支配権を持つ）・ハーンの称号を持ち、ハルハ右翼の盟主であった。第三子の子孫がトシェート（補佐する）・ハーン(?)の称号を持ち、左翼の盟主であった。

漠北のハルハは、漠南のモンゴル諸部と同族であり、その王侯たちは親族同士であった。一六三六年、漠南のモンゴル諸部が後金国あらため清朝の臣下となると、残された漠北ハルハ部の王侯たちは動揺した。東方を管轄するハルハ左翼の王侯を中心として清朝に朝貢使節を送り、友好を表明する一方で、西方担当のハルハ右翼ジャサクト・ハーンを盟主として、長年仇敵であった西隣のオイラット諸部族の首長たちと、一六四〇年同盟を結んだ。

一六四〇年に制定された『モンゴル・オイラット法典』は、ハルハとオイラットの同盟条約であるとともに、各王侯に率いられた遊牧集団あるいは部族の連合であるハルハとオイラットそれぞれの内部における、集団間にもたがる事件の処理法を規定した裁判規範である。掠奪した人々や家畜、逃亡者などは、元来の持ち主に返還することを決めている。⁽⁸⁾ また同盟のあかしとして、ハルハとオイラットの王侯間で、いくつもの婚姻関係が結ばれた。

二、ジェブツンダンバ一世の称号の謎

(一) ターラナータの化身

ジェブツンダンバ・ホトクト一世は、このような時代の一六三五年、ハルハ左翼のゴンボ・トシェート・ハーンの次男に生まれた。一世が一七二三年に入寂した後、その転生である二世もまたトシェート・ハーン家の、一世の兄チャグンドルジの曾孫に生まれた。

ジェブツンダンバ・ホトクト⁽⁹⁾ *Jebjundamba* \wedge *rje* *bsun* *dam* *pa* *qutuytu* という名前は正式の称号で、後世モンゴル人はその転生をボグド・ゲゲーン *Boyda gegen* (お聖人さま) と呼んだ。一世だけは、非常に背が高かったので、ウンドウル・ゲゲーン (背の高いお方) と呼ばれたという。ジェブツンはチベット語で尊者、ダンバは正しき者、ホトクトはモンゴル語の敬称で、元来は聖者の意味であったのが、清朝時代には、この世に何度でも生まれ変わって来て衆生を救う高僧という意味になり、後には清朝政府が公認する称号となった。モンゴル語の *ホイルガン* *qubilyan* はチベット語の *トゥルク sprul sku* (化身) の訳語で、チベット語のリンポチェ *rin po che* (宝) は、トゥルクの敬称である。モンゴル語ではエルデニ *erdeni* と訳す。中国人はこれらすべての訳語として「活仏」を当てるが、これは不正確である。なぜなら、この世に何度でも生まれ変わって衆生を済度するのは菩薩であって、仏は涅槃に入って輪廻から解脱し、二度と生まれ変わることはないからである。

ジェブツンダンバ一世の父ゴンボの祖父アバダイは、ハルハ部王侯の祖ゲレセンジェの第三子ノーノホの長子

である。アバダイはハルハにチベット仏教を導入した人物として有名で、一五八五年夏にカラコルムの跡地に仏教寺院エルデニ・ジョー Erdeni juu を建立した。アバダイは一五八六年、漠南のトメト部を巡錫中のダライラマ三世に謁見し、オチル・ハーン Vačir qayan (ドルジェ・ギェルポ Do rje rgyal po) の称号を賜ったが、これがハルハ部の王侯中にハーンが誕生した始まりである。⁽¹⁾

少なくとも三種類知られているジェブツンダンバ一世の伝記中最も古いのは、一世の弟子ザヤ・パンディタ・ロサンティンレー Dzaya Pañḍita blo bzang 'phrin las (モンゴル語の綴りと発音はロブサン・パリンライ Lobsang paringlai) が、一世がまだ在世中の十八世紀初頭にチベット語で書いたものである。著書ロサンティンレーは、一六四二年にハンガイ山で生まれ、ジェブツンダンバ一世からノヤン・ホトクトの称号を授けられた。十九歳の時チベットに留学し、そこで十八年間学問に励み、ダライラマ五世からザヤ・パンディタ (サンスクリット語で、勝利の学者の意) の称号を賜った。ロサンティンレーはハルハに帰った後、ハンガイ山に移動僧院を創建したが、これは後にザイン・フレ (ザヤの僧院) と呼ばれて有名になった。ロサンティンレーが著したジェブツンダンバ伝中の最も新しい年次は一七〇二年であるので、著者は師のジェブツンダンバ一世の入寂した一七二三年以前に没したと推定される。⁽¹⁾

ロサンティンレーによるジェブツンダンバ一世伝は、主人公がチンギス・ハーンから数えて何代目の子孫に生まれたかという系譜に始まる。父方のみならず、ジェブツンダンバの母カンドギャツォ nkha'i gro rgya mtsho (モンゴル語綴りはハインドジャムツ Gandjuamcu) はアバダイの弟の娘の娘であるので、母方でもチンギス・ハーン

の一族に連なる家系であった。ロサンティンレーは、ジェブツンダンバ一世の宗教生活の始まりを次のように記す。

一六三八年四歳の時、ジェブツンダンバ一世はチャンパリン・ノムン・ハーン Byams pa gling No mon Khang によつて居士 (ゲニェン dge bnyen) となつた。翌一六三九年五歳の時、初めて正式に化身に就任 (坐床) し、出家 (ラプチュン rab byung) の戒を受けた。授戒の導師は、ケードツプ・サンギエイエシエ mkhas grub Sangs rgyas ye shes の転生であるウエンサ寺の化身 (ウエンサ・ツツルク dBen sa sprul sku) であつた。この時、ジェブツンダンバ一世はロサンテンペイギエンツェン blo bzang bstan pai rgyal mtshan (モンゴル語読みではロブサン・タンビ・ジャルツァン) と名付けられた。⁽¹²⁾

著者ロサンティンレーは以上の記述に続いてついでに、

この後、ダライラマ師弟 rGyal ba yab sras 方にお伺いをたてた時に、ジェツンタンバ rJe btsun dam pa の化身 sprul sku に認定なされた。

ハルハのジェブツンダンバ一世の前世としてここで述べられるジェツンタンバは、有名な『インド仏教史 rGya gar chos 'byung』の著者ジェツン・ターラナータ・クンガニンポ rJe btsun Taranātha Kun dga' snying po のことである。ジェツンは尊者、ターラナータはサンスクリット語でターラー菩薩 (救度母) に保護された者、クンガニンポが名前である。ターラナータは、一五七五年にウー dBus (中央チベット) とツァン gTsang (西チベット) の境上で生まれた、サキヤ Sa skya 派の流れをくむチョナン Jo nang 派の高僧である。かれは多

くのすぐれた著作を残した学僧としてチベット仏教史上に名高く、一六一五年ツァンの地にタクテン・プンツォクリン⁽¹³⁾ rTag brtan phun tshogs gling 寺を創建した。卒年は詳らかでない。

チョナン派、なかでもターラナータはカギユ派 bKa' bryud pa と密接な関係を持っていた⁽¹⁴⁾。カギユ派は、ダライラマ五世（一六一七—一六八二）の属するゲルク派 dGe lugs pa と激しく対立したカルマ派 Kar ma pa が属する宗派である。ダライラマ五世は、ハルハの有力王侯の息子を、なにゆえ自派と対立するチョナン派の高僧の転生と認定したのだろうか。これは従前、シエブツンダンバに関する最大の謎であった。結論から先に言えば、シエブツンダンバの称号は、実はダライラマ五世から授けられたものではなかったのである。次節でこれを論証する。

(二) ダライラマとシエブツンダンバの関係

ロサンティンレーの伝記に戻ろう。シエブツンダンバ一世は、一六四九年、十五歳の時に初めてチベットへ旅だった。かれは sku 'bun' Bva khyung dgon' Byang ra sgreng' Rin chen brag' Thang sag dga' idan chos 'khor' sTag lung' Se ra' 'Bras spungs' dGa' Idan など各地の名高い寺を巡礼して歩き、タシルンポ bKa' shis lhan po でパンチェンラマ自身からゲツル dge tshul (沙彌) の戒を受けた。一六五一年陰暦四月二十五日、シエブツンダンバ一世は初めてダライラマ五世に面会した。この記述に続いて、シエブツンダンバ一世がダライラマから様々な仏法を伝受したありさまを、ロサンティンレーは長々と記す。その後、パンチェンラマはこの訪

問者をターラナータの化身であることを確認したという。⁽¹⁵⁾

ところが、グライラマ五世の自伝には、一六五一年四月二十五日にジェブツンダンバが訪問した記事はない。その代わりに一六五〇年チベット曆十二月の項に、

カルカ・トシエト・ギェルポ *Khal Kha Thu shi ye thu rgyal po* の息子 *ジャムヤン・トゥルク* *Jam dbyangs sprul sku* と *オロト* *O rod ka* と *ロロン・シェリン* *Do go long tshen ring* など多くの旅客 *grul pa* が到る。⁽¹⁶⁾

とそつげなく記すのみである。同じくパンチェンラマ一世の自伝では、一六五一年チベット曆二月の項に、

ジャムヤン・トゥルペイク *Jam dbyangs sprul pa'i sku* 師弟 *ヤトシエイト* *Thu shai thu* 父子などカルカの多数の僧俗の旅客が到る。⁽¹⁷⁾

とあるだけで、ジェツン・ターラナータの化身と認定したとも、称号を授けたとも言っていない。

グライラマ五世とパンチェンラマ一世が、各々の自伝の中でジェブツンダンバ一世を指して言う「ジャムヤン・トゥル(ペイク)とは、「文殊菩薩の化身」という意味である。ジェブツンダンバ一世は、チベットへの巡礼に出發する前に、すでに化身の認定を受けていたことは確実であり、その認定が、グライ、パンチェン両ラマによるものでなかったことは以上によって明らかである。

かつて筆者が指摘したように、『大清世祖章(順治)皇帝實錄』には、チベットへ出發する二年前の一六四七(順治四)年五月己酉の条に、

喀爾喀部落札薩克圖汗下俄木布額爾德尼・諾門汗下丹津胡土克圖・土謝圖汗下澤卜尊丹巴胡土克圖等、貢方

物、宴賽如例。

とある。「ハルハ部落ジャサクト・ハーンのものオンプ・エルデニ、ノムン・ハーンのものダンジン・ホトクト、トシエート・ハーンのものジエブツンダンバ・ホトクトが、清朝に貢ぎ物を携えた友好使節を派遣してきたので、例にならつて宴を張り、贈物を賜った」ことを伝えるこの例からも、ジエブツンダンバ・ホトクトは、チベットへ出発する前、すでにその称号を有していたことが証明される。

ジエブツンダンバ一世自身の弟子であつた最初の伝記の著者ロサンティンレーは、師が一六四九年にチベット訪問に出発し、グライ、パンチエン両ラマに会う前に、すでにジュツン・ターラナータの化身に認定されていたことを知っていたので、師が五歳で出家の戒を受けたという箇条の直後に、年代を明らかにせず「この後、グライラマ師弟方にお伺いをたてた時に、ジュツンダンバの化身に認定なされた」という曖昧な一句を挿入した。

後世に著されたジエブツンダンバの伝記では、もはやそのような斟酌もしない。一八五九年にモンゴル語で書かれた著者不明のジエブツンダンバ伝は、一世から七世までの伝記で、ポーデン教授がローマ字転写と英訳を發表したので広く知られている。ただし事蹟を詳しく物語るのはい世から三世までで、四世から七世は、誕生と即位の日時を列挙するだけである。これによると、ジエブツンダンバ一世は、一六四九年に初めてチベットを訪れ、一六五〇年にパンチエンラマからゲツル ge'chil(沙彌)の戒を受け、グライラマから金剛手 Vajr erke の灌頂を聴き、ジエブツンダンバ・ラマの称号と黄傘の使用を許されたことになっている。⁽¹⁸⁾

一八九二年に自らモンゴルに調査旅行を行ったロシア人ボズドネエフは、様々な資料を蒐集し、あるいは聞き

取り調査をしたのであろう。ジェブツンタンバ一世について次のように言う。「一六五〇年春チベットに入り、先ずタシルンポのパンチェンラマを訪問して種々の法戒を受け、これよりポタラに赴きグライラマから深い宗義法戒を受けた。かれは修法にふけてグライラマの居城であるポタラに半年余居り、グライラマ五世はこの間、その若いハルハのラマが従順な弟子であることを見て取って、かれをターラナータの化身であると宣言することを決断した。⁽¹⁹⁾」

ジェブツンタンバ一世のチベット訪問前後の情勢は、實際は極めて緊迫したものであった。一六四二年、オイラットのグーシ・ハーンがゲルク派の求めに應じてチベット全土を制圧し、その後、グーシ・ハーンの保護下で、グライラマ五世は反対派の弾圧に乗り出した。カルマ派は言うに及ばず、ジェツン・ターラナータのチョナン派もきびしい弾圧を受けた。チョナン派はやがて、一六五〇年に禁教となり、その寺であるタクテン・プンツォクリンはゲルク派に改宗させられ、一六五八年には寺名もガンデン・プンツォクリンと改められた。⁽²⁰⁾

しかし、最近の山口博士の研究によると、グライラマ五世は、これまでかれ自身の宣伝によつて信じられてきたように、一六四二年に全チベットの聖俗両方の支配者になったのではなかった。オイラットのグーシ・ハーン自身がチベット国王の位に就き、グーン・ハーンが任命した摂政 *sdé sri* ソナム・ラプテンがチベットの世俗の統治権を握った。グライラマ五世は、この時チベット仏教界の教主に推戴されたにすぎない。政治的手腕に長けていたグライラマ五世は、一六五四年十二月にグーシ・ハーンが亡くなり、五八年に摂政ソナム・ラプテンが死んだ後、その継承問題を巧みに操作して、チベットの統治権を手中にした。そして、それ以前の自らに都合の悪

い文献を改作し、あるいは抹消してしまったのである。⁽²¹⁾

ジェブツンダンバ一世がチベットに入った一六五〇年と言えば、かれの前世ターラナータの属したチョナン派が禁教となった年である。ターラナータ自身の創建したタクテン・プンツォクリンも、ゲルク派に改宗させられている。しかし現存のチベット史料は、グライラマ五世の検閲を通過した後のものばかりであるから、真相は明らかではない。ジェブツンダンバ一世は、一六四九年にハルハを出立し、ポズドネエフの言うように青海のクンブムで一冬を過ごしたとしても、一六五〇年春にはチベットに到ったはずである。五〇年十二月にグライラマに会见するまで、どこに滞在していたのだろうか。実はかれは、自分の前世の創建したチョナン派の寺院に巡礼していたのである。

前述の、一八五九年にモンゴル語で書かれたジェブツンダンバ伝によると、一六五〇年にグライラマからジェブツンダンバ・ラマという号の使用を許された後、パンチェンラマから閻魔敵 Yamantaka の灌頂を聴き、様々な秘伝や法の伝授を受けたとし、その記事の直後に次のようにある。

また、寺々に布施茶 *manga* や割布施 *ted* を供養し、また、前世の時に建てた寺から、倉にしまっていた
柁檀の葉に黄金で書いた八千頌般若 *jaddamba*、彌勒 *mayidar*、観音 *logasiri*、多羅 *dara* などの大いなる
靈験のある仏像、経典を数限りなく多く招来した。⁽²²⁾

ロサンティンレーの著した伝記には、このような記事はない。ジェブツンダンバ一世のチベット訪問以前の時期についても、五歳で出家の戒を受けてからの十年間に、先に引いたグライ、パンチェン両ラマに称号のお伺い

をたてた記事しかない。ゲルク派である著者には、禁教となつたチヨナン派に関する事蹟を記載する自由がなかつたのであろう。

実は、ジェブツンダンバー一世の曾祖父アバダイが開いたハルハ最初の仏教寺院エルデニ・ジョーは、サキヤ派の僧侶が開基式を執行し、その後もハルハにはサキヤ派のチベット仏教が普及していたのであつた。ジェブツンダンバ・ホトクトも、その称号から見て、最初はゲルク派に属していなかつたことは確實である。

最初のジェブツンダンバー一世伝の著者ロサンティンレーは、グライラマ五世の統治権が確立した後の一六六〇年から十八年間チベットに留学し、グライラマ自身から称号を授かつてゐる。かれはゲルク派の高僧であつたので、ジェブツンダンバの伝記をゲルク派の立場から著したのである。しかし、そのような個人的理由を越えて、かれが一世伝を書いた十八世紀初頭には、清朝皇帝もチベットにおけるゲルク派の勢力を認め、これを仏教の正統派とみなしていた。ジェブツンダンバー一世が全ハルハの仏教教主と認定されるためには、その称号はゲルク派のグライ・パンチェン両ラマから授かつたものでなくてはならなかつたのである。

ジェブツンダンバー一世は、自派のチヨナン派が禁教となつた当時の一六五〇年にグライラマ五世に会見して、果してゲルク派に改宗したのだろうか。次章で述べる、十七世紀後半のハルハ左翼とオイラットの対立、およびオイラットのガルダン・ハーンがジェブツンダンバ・ホトクトに示した敵意を考えると、そのことすら疑わしい。

三、ハルハの内乱から清朝帰属へ

(一) ハルハ左右翼の対立

一六六二年、ハルハ右翼で内紛が起こった。右翼の有力王侯エリンチン・ロブサントイジが、宗主である同族のジャサクト・ハーン・ワンチュクを襲殺したのである。右翼の王侯が、左翼のトシエート・ハーン・チャグンドルジらの援兵を得てエリンチンを襲ったため、エリンチンは自分の根拠地であるウブサ湖畔から北方トウワの地に逃れた。この紛争で、ジャサクト・ハーンの多くの属衆が難を避けてトシエート・ハーンの属下に入った。ハルハ左翼の王侯から情報を得た清朝側の記録では、この時エリンチンはオイラットに逃れたとある。エリンチンの祖父シヨロイ・ウバシ・ホントイジは、ハルハの先鋒としてオイラット諸部に君臨し、ロシア史料でアルティン・ツァーリ（IIアルタン・ハーン）と呼ばれた人物である。シヨロイは一六二三年四オイラット連合軍に敗れて殺されたが、その直系の子孫であるオンブ・エルデニとエリンチン父子は、オイラットの故郷であるトウワの住民を自己の属民として支配し続けていた。

しかし、一六四〇年以来ハルハとオイラットは同盟関係にあった。エリンチンは、ハルハ左翼のトシエート・ハーンとオイラットのジュンガル部長センゲの両方から攻撃を受け、一六六七年、妻子、姉妹とともにジュンガルのセンゲに捕らえられた。²³⁾

センゲはその後一六七〇年に異母兄たちに暗殺され、かれの同母弟ガルダンが、チベット仏教の僧侶から還俗

して兄の仇を討ち、一六七一年にジューンガル部長となった。ガルダンは、ジューンガルのバートル・ホントイジと、チベット国王となったホシユートのグーシ・ハーンの娘の間に一六四四年に生まれ、その前年に亡くなった高僧ウエンサ・トゥルクの転生と認定された⁽²⁴⁾。このウエンサ・トゥルクとは、実はジェブツンダンバ一世が五歳の時、かれに出家の戒を授けた導師である。ガルダンにとってみれば、ジェブツンダンバは自分の前世の弟子である。ガルダンは一六五五年から十年間チベットに留学し、ダライラマ五世の直弟子であった⁽²⁵⁾。

ガルダンは、一六七一年ダライラマ五世の認可を得て父と同じホンタイジを号し、七六年舅のホシユート部のオチルト・ハーンを捕虜として、ついにオイラット部族連合の盟主の地位を獲得した。一六七八年、ダライラマ五世はガルダんにテンジン・ボシヨクト・ハーン（持教・受命王）の称号を授けた。ガルダン・ハーンは一六八二年、殺された兄ワンチュクの跡を継いでいたハルハ右翼のジャサクト・ハーン・チェンゲンに、同盟条約通り、エリンチンを送還してきたのである⁽²⁶⁾。

同じ一六八二年、ジャサクト・ハーンは、ハルハ左翼のトシエート・ハーン・チャグンドルジに、紛争以来かれが隠して返還しないジャサクト・ハーン部の属衆を返すように申し入れた。ところがトシエート・ハーンは耳を貸さず、両者の不和は益々甚だしくなっていた。

清朝は一六八一年ようやく三藩の乱を鎮圧し、北方に進出してきたロシアに本格的に対処しようとしていた矢先であった。ハルハ・モンゴルは、ロシアとの緩衝地帯に位置する清朝の友好国であったので、康熙帝はその内紛に無関心ではいらなかった。両ハーンの不和を調停するために、一六八六年、康熙帝は理藩院尚書アラニと

グライラマが派遣したカンデン寺の座主を、ハルハのクレーン・ベルチル地方に赴かせ、ハルハ両ハーンを召して会盟させた。⁽²⁷⁾しかし、トシエート・ハーンは会盟の約束であつたジャサクト・ハーンの人民を半分しか返還しなかつた。また、ジエブツンダンバが会盟の席上、グライラマの使者と同じ高さの座を占め、対等に振舞つたことに對して、ジューンガルのガルダンはグライラマに対する憎越であると怒り、ハルハ左右翼の対立は、ハルハ左翼とジューンガルとの対立に發展した。

(二) ガルダンの侵入とハルハの清朝帰属

一六八七(康熙二十六年)年秋、前年の会盟直前に死んだハルハ右翼のジャサクト・ハーン・チェンダンの跡を継いだその子シヤラが、何人かの王侯とともにガルダンの援助を求めてジューンガルへ赴こうとした。左翼のトシエート・ハーン・チャンドルジはかれらを追跡し、ジャサクト・ハーン・シヤラを殺した。また、ガルダンの弟ドルジジャブがハルハ右翼の人畜を掠奪したため、トシエート・ハーンはドルジジャブを追跡して殺した。ここに至つて、ついに一六八八年春、オイラットのジューンガル部長ガルダン・ボシヨクト・ハーンは、三万の兵を率いてハルハの西境から侵入し、ハンガイ山脈を越えた。

ハルハ左翼の盟主トシエート・ハーン・チャグンドルジは、テムル地方でこれを迎え撃つたが、大敗を喫してオンギン河に逃走した。ガルダンは軍を二手に分けて、自らはトーラ河を横切つてケルレン河のチェチェン・ハーンの遊牧地に侵入し、別動隊をオルホン河畔のエルデニ・ジョーに派遣し、ジエブツンダンバ・ホトクトを攻

めさせた。ジェブツンタンバは、兄トシェート・ハーンの妻子を連れて南奔し、内モンゴルのスニト部の界に至つて清の康熙帝の保護を求めた。陰曆七月二日のことである。⁽²⁸⁾

同年秋、ガルダンはケルレン河より兵を返してトーラ河沿いの地域を掠奪した。一方トシェート・ハーン・チャグンドルジは、属下の衆をすべて集めてオロゴイ・ノールに至り、この湖畔で八月三、四日にオイラットとハルハの大決戦が行われた。三日にわたる戦いの後、敗れたハルハは潰散し、トシェート・ハーンはゴビ砂漠を越えて、スニトの地にいるジェブツンタンバのもとに逃れてきたのであつた。⁽²⁹⁾

ハルハの大衆は雪崩をうつて内モンゴルに逃げ込み、漠北の地は完全にガルダンの手に落ちた。清の康熙帝は数十万にのぼる亡命ハルハ人のために、内モンゴルにそれぞれ牧地を指定し、家畜を与え、中国内地から穀物を運んで救済につとめた。

一六九〇年の夏の終わりに、ガルダンは二万の軍を率いて、ケルレン河から南下した。八月、北京の北方三百キロメートルのウラーン・プトンの地で、清軍とガルダン軍が衝突した。ガルダンの方の講和の条件は、トシェート・ハーン・チャグンドルジとジェブツンタンバの引き渡しであつた。康熙帝の兄の撫遠大將軍裕親王がこれを拒否すると、今度はグライラマ五世の摂政サンギェギャツォがガルダンのもとに派遣していた高僧ジェドゥン・リンポチエ自身が来て、条件を緩和して、ジェブツンタンバをラサのグライラマのもとに送ることを申し入れた。⁽³⁰⁾ガルダンのみならず、ゲルク派もまだこの時点でジェブツンタンバを敵視していたことが明らかである。

しかし、清軍の増援部隊が到着する前に、ガルダンは漠北に引き揚げていった。清朝に命を助けられたトシェ

ート・ハーンとジェブツンダンバは、一六九一（康熙三十）年五月、フビライが建てた上都の跡地ドローン・ノールで、清の康熙帝に臣従を誓った。この時、ハルハ左翼に属していたチエチエン・ハーン、右翼の殺されたジャサクト・ハーン・シヤラの弟ツェワンジャブも列席した。³¹こうして、いわゆる外モンゴル・ハルハ部は、同族である内モンゴル諸部に遅れること半世紀余にして、満洲皇帝の臣下となったのである。

露清間でネルチンスク条約が締結されようとしていたこの時、ロシアに降ったハルハ王侯もあった。一六八九年春までにロシアへの臣属を誓った二十名ほどのハルハ王侯たちの多くが、ガルダンの侵攻によって北方に遮断された左翼トシェート・ハーン部に属する者たちであった。右翼からは、先にハルハの内紛を惹起したエリンチン・ロブサンタイジの従兄弟ゲンドウン・ダイチンと二人の息子だけがロシアに臣従を誓った。清朝時代にはホトゴイト部と呼ばれるゲンドウン一族の遊牧地はシベリアに隣接しており、十七世紀初頭からロシアと交渉を持った家系であるから、この時点でゲンドウンがロシアに臣従を誓ったのは当然の帰結と言える。しかし、ロシアへの臣属条約に署名したハルハ王侯の多くが、八九年後半にはロシアから離反し、ゲンドウンを含む一部のものはガルダンに帰服した。さらに一六九一年のドローン・ノールの会盟以後は次々と清に帰属し、一六九四年にはゲンドウン・ダイチンも清に来朝した。結局、ロシアに臣従を誓ったハルハ王侯のほとんどが、清に帰属したものである。³²

四、ジェブツンダンバ伝説の成立

(一) 三つのジェブツンダンバ伝の比較

一六八八年にハルハの人々が清朝の保護を求めた際、ジェブツンダンバ・ホトクトに決裁を仰ぐ王公大会議はなかつたことはすでに明白であるが、このような物語が清代ハルハで創られたのには、理由があるに違いない。最後にこの伝説がいつ、どのようにして成立したかを明らかにしたい。

十四年前の拙論ですでに指摘しているが、『蒙古游牧記』で引用されて流布したハルハ王公大会議の伝説の源は、松筠の『綏服記略圖詩』（一七九六年の自序あり）の注である。ここにその記事を再録する。

先是、準噶爾厄魯特最爲強悍、與喀爾喀讐殺不已。康熙二十七年、喀爾喀力微、不能抵敵、衆議就近投入俄羅斯爲便、因請決於哲布尊丹巴胡土克圖。時胡土克圖曰、我輩受天朝慈恩最重、若因避兵投入俄羅斯、而俄羅斯素不奉佛、俗尚不同、視我輩異言異服、殊非久安之計。莫若攜全部內徙、誠投大皇帝、可邀萬年之福。衆欣然羅拜、土謝圖汗遂請胡土克圖、率衆內附。³³

松筠は一七八五―九一（乾隆五十―五十六）年に庫倫辦事大臣の職に在った間、八十歳近い年齢のゲジャイドルジからこの話を聞いた。ゲジャイドルジは、ジェブツンダンバ一世の兄トシェート・ハーン・チャグンドルの曾孫で、ジェブツンダンバ二世の兄にあたる。³⁴

一八五九年にモンゴル語で書かれたジェブツンダンバ一世伝では、年代は明記しないが次のような話を伝え

る。

多くの衆生の安樂のためにハルハの衆の願いを持ってお伺い申し上げ、「多くのハルハ人たちが一つになつて太平安樂に暮らすためには如何すればよろしいか、われらのラマ御自身に伺いたい」と言った時に、「北方のオロスという黄キタトのハーンの政治は安樂で、偉大な国ではあるけれども仏法は広まっていない。また衣の衿は逆である故によろしくない。南方の黒キタトのハーンの政治は公平安樂であつてよい上に、また仏法が広まっている。さらにマンジュのハーンの衣は天人の衣のようであり、財物は天の龍たちの財宝、絹織物と等しく満ち満ちている。大いなる功德のあるハーンに違いない故に、その方向に行けば政治は定まり、すべての衆生は安樂に暮らす」と仰せられたので、マンジュの大ハーン35の政治に従うために降つて黄教を広め、賞賜や礼遇を厚くして平らかに楽しんだ。

十八世紀初頭にロサンティンレーが著した最初のジェブツンタンバ伝は、ガルダンのハルハ侵攻と清朝帰属について次のように述べるだけで、会議の話は登場しない。

戊辰 mam byung(二六八八)という辰年二月に、ポショクト Po shog thu は自分の国から出陣して、ハルハ Khal Kha 右翼のエルシゲン El ci ken という二會長だけを征服した。それから次第にハルハのまん中に至つて、かれ自身の運勢が広がったので、ハルハの衆を追い払った。エルデニ・ジョー Er te ni jo bo などの佛堂 lha khang、僧院 dgon pa 各々のうち、あるものを毀し、あるものの仏像なども毀した。これなる聖者 rje 'di(ジェブツンタンバ)の御座所 sgar(キャンプ)の仏像大小と、リウオゲギェリン Ri bo dge rgyas gling

(ガンタン寺)の寺院すべてを破壊したなど、よからぬことをたくさんさった。その時、一人の人がよからぬことをすると、たくさんのおの御行為が尽きると言われる如く、これなる聖者は、業の力によってハルハに不運がやって来ることを御存じになって、皇帝 *Gong ma rgyal po* (清の康熙帝) の方にいらっしゃった時、ごく少しの間だけだったが悪いことはかり起こったけれども、遅滞なく、ハルハ左翼のウリヤンハン *U rang khang* のタイチン *T'ai ching* など二人によって、言い分がないくらいに立派に丁寧な接待がされた。その時、皇帝は、ベ・カタララ・アンバン *Be Kha tar Am pang* など高官たちを出迎えに遣わして、同行者たちに、穀物・錢糧・家畜などと、御自身(ジエブツンタンバ)にも献上品をたくさん下さった。⁽³⁶⁾

一八三九年、ジエブツンタンバ五世の時代にガギワンポ *Nsag gi dbang po* がチベット語で著した一世伝の内容を見てみると、ガルダン・ポシヨクト・ハーンがハルハに攻め込んだ情景の記述は、そっくり先行のロサンテインレーの著述から引用しておきながら、ジエブツンタンバがハルハに業の力によって不都合がやって来ることを悟り、満洲皇帝の方に出かける時の説明が増加する。

最上の保護者 *skyabs ngon mchog* (ジエブツンタンバ) の御座所の仏像大小と、リウオゲギエガンテンシエートプリン *Ri bo dge rgyas dga' Idan bshad sgrub gling* (ガンタン寺) の寺院すべてを破壊したなど、よからぬことをたくさんさったので、聖者御自身が御命令になって、仏法一般の繁栄と、四業成就を求める法事を、大行者レクツォの化身とメルゲン・ノミン・ハン(法王)の二人がお仕事を始めて、その時、一人の人がよからぬことをすると、たくさんのおの御行為が尽きると言われる如く、最上の保護者 *skyabs ngon*

dam pa 御自身が、業の力によってハルハに不運がやって来ると、聖者自身が大皇帝 Gong ma chen po に呪いを離れることの解脱になるであろうということ、満洲大皇帝 Jam dbyangs gong ma chen po に依つて聖者の仏教衆生を悟りに向かわせる利益の御行爲も大きいので、(聖者自身が) 差障りを離れた智慧の眼で御覧になって、皇帝の国の方に化身ロサン・テンジン・ギェンツェンを初めとして随員百人以上とともに、こつそりと馬に乗られていらつしやつた。

さらに、ガギワンプの伝記では、ジェブツンダンバが満洲皇帝の官吏である国境守備の尚書侍郎のもとに使者を遣わして皇帝の保護を求め、その指示を仰ぐくだりが長々とつけ加わる。

ジェブツンダンバ・ホトクトから家来を派遣してお願い事があつた。それには「大皇帝陛下が領地を賜つて、仏法の有りようのために努力しなさいという御命令がありました。そのように、私が仏法をおこなつております折りに、いきあたりばつたりに行動するオイラットがやつてきて、私の寺廟を燃やしてしまい、仏法も跡形もなくなりました。もう一度皇帝のお言葉に合わせ従うより仕方がないと思うのでありますが、昔から私の心には、天の神の領民として国境の一隅に行かれたならばと思う気持ちがあります。ホトクトが自身の土地の端に生まれることになつてしまつたために、願ひ事がつのも、私は全く田舎の人でありますので、お願い申し上げます。思つたことを申し上げることもできませんでした。私の弟子たちは非常に多くおりますので、大皇帝陛下の政治力にお頼りし、養つていただけると、私の思いは完成いたします。大皇帝陛下が私を憐れみの御眼差しで御覧下さり、しかるべき土地を領地として下さるならば、非常

に有難く存じます。私の寺廟も新しく建ててもらえますし、それに相応して左右二翼のタイジたちも皆、私との法の主従関係になることになるので、我々主従も皇帝の支配下で仕えることができると申し上げております。」

これに対して満洲皇帝がお言葉を賜る。

「ハルハ、オーロト Oi Ird 二つは、以前から朝貢を奉っていたので、汝らに援助を賜っていた。今汝は決心して諸々の事情を訴え出たということは、真によい決心をしたけれども、とりあえずオロスのチャガン・ハノ O ro sui Cha kan han とも人を遣わして協議をした方がよい。」

伝記はこの後ロサンティンレーの引用に戻り、皇帝からの賜物があつたことを述べて、その後、ジェブツンダンの居所を守るために皇帝は二百人ばかりの軍隊を遣わされたと、ロサンティンレーにない記事が続ける。⁽³⁷⁾

ガギワンポがジェブツンダンバ一世伝を著したより半世紀も前に、松筠はハルハ王公大会議の伝説を聞いている。ガギワンポはこの話を知っていたが、先行のロサンティンレー著の一世伝を忠実に引用し、これに増補を加える形で記しているため、ガルダン侵入時に王公大会議が開催された物語を挿入すべき場所がなかった。その代わりに、康熙帝自身の言葉として「オロス（ロシア）のチャガン・ハーン（ツァーリ）と協議した方がよい」とつけ加えたのであろう。

(二) 十八世紀中頃のハルハの実情

一六九一年清に帰属した時、清朝はハルハ諸侯を内モンゴルの王公に倣ってジャサク（旗長）に任命し、爵位を授与した。この時内モンゴルの地に亡命中であったハルハ王公に対して、むろん旗地の指定はしていない。清から欽差大臣が派遣されてハルハ各部の牧地の境界が定められたのは、実に帰属後九十年経た一七八一（乾隆四十）年のことである。清代、内モンゴルの王公を内ジャサクと呼んだのに対して、ハルハ王公を外ジャサクと呼んだので、ハルハ部は俗称外モンゴルと呼ばれる。ただし、内外モンゴルとも「外藩蒙古」である。もとのハルハ左翼に属した王公は最初トシエート・ハーン部、チエチエン・ハーン部の二盟に編成され、一七二五（雍正三年）、トシエート・ハーン部から十九旗を独立させて新たにサイン・ノヤン部が設置された。右翼の王公はジャサクト・ハーン部の一盟に編成された。

一六九六（康熙三十五）年、漠北に遠征した清軍がガルダン軍を大破し、翌年ガルダンがアルタイ山中で病死した後、ハルハの人々はようやく故郷に帰還するが、ガルダンの甥ツェワンラプタンが率いる西隣のジューンガルとは臨戦体制が続いた。一七五四（乾隆十九）年ジューンガルの内紛の結果、ツェワンラプタンの外孫アムルサナーが清に降った。この機を利用して、五五年清は大軍をイリに送ってジューンガルを滅ぼした。アムルサナーは清に叛いて独立を宣言したが、五七年にシベリアで天然痘で死に、オイラット諸部はすべて清に帰属した。一度は清に降ったアムルサナーがイリで清に叛旗を翻す前、これを察知した清はハルハのジャサク親王エリンチンドルジにアムルサナーを熱河に護送するよう命じた。イルティシユ河でアムルサナーに逃亡されてしまったエリンチンドルジは、一七五六（乾隆二十二年）、北京で処刑された。³⁹ エリンチンドルジはトシエート・ハーン

息子に生まれ、ジェブツンダンバ二世の兄であった。ハルハの西北辺に位置するホトゴイト部の、かつてロシアに臣従を誓ったゲンドウン・ダイチンの子孫チンゲンザブは、チンギス・ハーンの血統の王を無実の罪で殺したことを理由として、同年清朝に対して叛旗を翻した。

ジェブツンダンバ二世が乱を鎮めるため乾隆帝に協力したと、チンゲンザブの反乱自体が計画性がなかったため、これは短期間で鎮圧された。母がホトゴイト部出身であったジェブツンダンバ二世は、乾隆帝にチンゲンザブの助命嘆願を行なったが、容れられなかった。⁽⁴⁰⁾

同じ頃、ロシア側の史料によると、ハルハの中にロシアへの帰属の動きがあったという。ハルハ全体がロシアに帰属するか否かは、ただジェブツンダンバ・ホトクト二世の意志にかかっているというのが、シベリアの当局者たちの認識であった。しかし、ホトクトに礼拝するためにハルハの多くの首長が集まる「白い月のウルガでの王公の集会」(正月のモンラム)を前にして、乾隆二十二年十二月(一七五八年二月)、ジェブツンダンバ二世は三十四歳で天然痘で逝去した。⁽⁴¹⁾

実際には、ロシア側の希望的観測に反して、ジェブツンダンバ・ホトクト二世もハルハの王公の大多数も、ロシア帰属には甚だ消極的であった。「白い月の集会」は、かれらの信仰によってホトクトに礼拝するためのもので、ロシア帰属の決議がされるはずもなかった。⁽⁴²⁾ それにしても、この時の状況は、ハルハ王公大会議の伝説とあまりにもよく似通っているのではないか。

ジェブツンダンバ・ホトクト一世が、一六八八(康熙二十七年)年ハルハ王公大会議の席上清朝帰属を決定したと

いう伝説は、二世の後見人であったその兄ゲジャイドルジが、トーラ河畔に固定して間もないイフ・フレール(庫倫)⁴³に清から派遣された辦事大臣松筠を相手に語ったのが源である。一世とその転生である二世とでは、肉体は変わっても人格は同一であるから、この伝説は、一世の話であると同時に二世の話でもあったと言つても過言ではあるまい。

おわりに

十七世紀にハルハ諸侯を臣下とした康熙帝は、モンゴル人の皇太后の膝下で育ち、自らを頼ってきたハルハの人々のために親征を決意するほどモンゴル人に親近感を持っていた。しかし、康熙帝の孫の乾隆帝にとつてのモンゴルは、清帝国の他の構成員と等しく父祖の代からの家臣にすぎなかつた。ことに、ハルハにとつては長年のライヴァルであり、清にとつても厄介な存在であったオイラットのジュンガルが十八世紀中葉に滅びた後、清朝とハルハとの関係は変化した。長年清の辺疆防衛の任にあつたハルハ・モンゴルの重要性は低下した。清代のハルハ史に、ジュンガルの滅亡とともに一つの転期が訪れるのは、極めて当然のことである。

ジェブツンダンバ三世は、ハルハ王公の願ひもむなしく、乾隆帝の意志に沿つてチベットに転生した。⁽⁴⁴⁾これから後、八世に至るまでのジェブツンダンバ・ホトクトは、すべてチベットに転生することとなる。

十八世紀後半以後の清朝とモンゴルとの関係は、今度は一八四〇年に始まるアヘン戦争を境に再び変化し、清朝の中国への依存の度合が大きくなつた。十九世紀末に至ると中国は人口が増えて貧窮化し、モンゴル高原にも

多くの漢人農業移民や商人が流入した。二十世紀初めには、このため、モンゴル人の間に、清朝に対する失望と、漢人に対する反感が高まった。

一八七一年にチベットに転生し、七四年にイフ・フレーに坐床したジェブツンダンバ八世は、このような時代背景のもとでモンゴル人よりも過激なモンゴル民族主義者となり、一九一一年ハルハ・モンゴル独立の象徴に担がれることになった。

八世は、モンゴル独立宣言以前にトシェート・ハーン部の全王公に送った書簡の中で、「私はまた、ハルハのトシェート・ハーンの息子（Ⅱジェブツンダンバ一世）、ダルハン親王の息子（Ⅱ同二世）として暮らした者、継承した者の魂が宿っているのであるから、黄金の一族に属するのである」と誇らしげに語っている。⁽⁴⁵⁾

ジェブツンダンバ八世が、チベット人の僧侶でありながら、一九一一年にはモンゴル・ハーンに推戴され、一九二一年には臨時人民政府の元首に推戴され得た理由は、かれが、一世・二世と同じくチンギス・ハーンの後裔であり、モンゴルの王権の正統の継承者とみなされたからに他なるまい。

参 照 文 献

岡洋樹「ハルハ・モンゴルにおける清朝の盟旗制支配の成立過程——牧地の問題を中心として——」『史學雜誌』九七—二、一九八八年、一一三—二頁。

岡洋樹「第三代ジェブツンダムバ・ホトクトの転生と乾隆帝の対ハルハ政策」『東方學』八三、一九九二年、九

五—一〇八頁。

岡田英弘「ダヤン・ハーンの六万戸の起源」『榎博士還暦記念東洋史論叢』、山川出版社、一九七五年、一二七—一三七頁。

岡田英弘『康熙帝の手紙』、中央公論社、一九七九年。

岡田英弘「ウリヤンハン・モンゴル族の滅亡」『榎博士頌寿記念東洋史論叢』、汲古書院、一九八八年、四三—五八頁。

宮脇淳子「十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル」『東洋學報』六一—一・二、一九七九年、一〇八—一三八頁。

宮脇淳子「モンゴル・オイラット関係史——十三世紀から十七世紀まで——」『アジア・アフリカ言語文化研究』二五、一九八三年、一五〇—一九三頁。

宮脇淳子「ガルタン以前のオイラット」『東洋學報』六五—一・二、一九八四年、九—一二〇頁。

宮脇淳子「オイラットの高僧ザヤルパンデイタの伝記」『チベットの仏教と社会』、春秋社、一九八六年、六〇—三—六二七頁。

宮脇淳子「オイラット・ハーンの誕生」『史學雜誌』一〇〇—一、一九九一年、三六—七三頁。

森川哲雄「チングンジャブの乱について」『九州大学教養部歴史学・地理学年報』三、一九七九年、七三—一〇三頁。

森川哲雄「外モンゴルのロシア帰属運動と第二代ジェプツンダムバ・ホトクト」『九州大学教養部歴史学・地理学年報』九、一九八五年、一—四〇頁。

柳澤明「イフ・フレ（庫倫）貿易について」『史観』百十五、一九八六年、七三—八五頁。

柳澤明「ガルダンのハルハ侵攻（一六八八）後のハルハ諸侯とロシア」『清朝と東アジア』、山川出版社、一九九二年、一七九—一九六頁。

山口瑞鳳『チベット（上・下）』、東京大学出版会、一九八七、八八年。

山口瑞鳳「ダライラマ五世の統治権——活仏シムカンゴンマと管領ノルブの抹殺——」『東洋學報』七三—七四、一九九二年、一—三—一六〇頁。

AFPL: *The Autobiography of the First Panchen Lama BLO-BZANG-CHOS-KYI-RGYAL-MTSHAN*.

Gedan Sungrab Minyam Gyumphel Series, Volume 12, ed. by Ngawang Gelek Demo, New Delhi, 1969.

BÄWDEN, Charles R., *The Jeksundamba Khutukhtas of Urya*. Asiatische Forschungen, Band 9, Wiesbaden, 1961.

CWJP: *Collected Works of Jaya-Pañdita Blo-bzari-iphvin-las*, Volume 4. Sata-Pitaka Series, Volume 281, ed. by Lokesh Chandra, New Delhi, 1981, pp.124-156. (四卷六十二葉—七十八葉)

DL-V: *Za hor gyi bande ngag dbang blo bzang rgya msho'i 'di snang 'khrul pa'i rol rtsed rtogs bryod kyi tshul du bkod pa du ka' la'i gos bzang*.

LWJ : *Life and Works of Njicundamba I. Šata-Pitaka Series, Volume 294.* ed. by Lokesh Chandra, New Delhi, 1982.

Galdan, *Eydeni-yin erike*. Monumenta Historica, Tomus III, Fasc. 1. Ulaanbaatar, 1960.

MIYAWAKI Junko, "Tibeto-Mongol relations at the time of the First Rje btsun dam pa Quturṭu."

TIBETAN STUDIES, Narita, 1992, pp.599-604.

OKADA Hidehiro, "Five Tibeto-Mongolian Sources on the Rje btsun dam pa Quturṭus of Urga."

Bulletin of the Institute of China Border Area Studies 『國立政治大學邊政研究所年報』, No.16, 1985, pp. 225-234.

POZDNEYEV, A.M., *Mongolia and the Mongols*. Uralic and Altaic Series, Vol.61, Bloomington, 1971.

SÁRKÓZI, Alice, *Political Prophecies in Mongolia in the 17-20th Centuries*. Akadémiai Kiadó, Budapest, 1992.

TUCCI, Giuseppe, *Tibetan Painted Scrolls*. La Libreria Dello Stato, Rome, 1949.

註

(1) ここですべてを列挙する紙数の余裕はないので、本論の引用論文のみ参考文献に挙げる。諸氏の御寛恕を請う。

(2) 『北方ユーラシア法系の研究』『清朝蒙古例の研究』『明末清初モンゴル法の研究』『清朝蒙古例の实效性の研究』『東洋法史論集第四』第七、創文社、一九八一、八一―八六、九二年。

- (3) 『ロシアの東方進出とネルチンクス条約』、近代中國研究センター、一九八四年。
- (4) 岡田、一九七五。
- (5) 岡田、一九八八。
- (6) 宮脇、一九八三、一六六一—一七〇頁。
- (7) 同右、一八三—一八四頁。宮脇、一九九一、四八、五〇—五二頁。
- (8) 宮脇、一九八四、九六一—一〇一頁。
- (9) 先の拙論では、フトウクトウと転写したが、モンゴル語の *ᠮ* は日本語のオの発音に近いので、ホトクトと書くことに改めた。ジェブツンタンバも、ハルハではジヤウザンタムバと発音するが、ここではチベット音を考慮して、このように記すことにする。
- (10) 宮脇、一九八三、一七四頁。
- (11) OKADA, pp.226, 229-230.
- (12) CWJP, pp.126-127. OKADA, p.227. 現代ハルハ語の文献では、ジェブツンタンバ一世の本名をザナバザル Zanabazar と記す。BAWDEN, p.44. によると、一六三八年居士の戒を受けた時にかはれはジュニャーナヴァジュラ Jhanavajra の名を与えられた。この名は、チベット名 イェシェドルジエ Ye she rdo rje に対応するサンスクリット形である。ジュニャーナヴァジュラをモンゴル風に発音するとザナバザルになる。
- (13) TUCCI, Vol.1, pp.163-164. 山口、一九八八、三二—三三三頁。
- (14) TUCCI, Vol.1, p.128.
- (15) CWJP, pp.127-129. OKADA, p.229.
- (16) DL-V, Ka. fol.154a, lines 1-2.
- (17) AFPL, fol.141a, line 5.
- (18) BAWDEN, pp.9-10, 44.
- (19) POZDNEYEV, p.327.
- (20) 山口、一九八八、三二—三三頁。
- (21) 山口、一九九二。
- (22) BAWDEN, pp.10, 45.
- (23) 宮脇、一九八三、一五二—一八三—一九一頁。
- (24) 岡田、一九七九、一四頁。
- (25) 宮脇、一九九一、六一、七一—七二頁。
- (26) 宮脇、一九八三、一九九—二〇〇頁。
- (27) 宮脇、一九七九、一三三—一三四頁。
- (28) 『親征平定朔漠方略』卷四、十五—二十頁。宮脇、一九七九、一二七頁。
- (29) 『大清聖祖仁皇帝實錄』康熙二十七年八月丁卯の条。宮脇、一九七九、一二七頁。
- (30) 岡田、一九七九、三三—三四頁。

- (31) 『實録』康熙三十年五月丙戌朔から己丑の条。
- (32) 柳澤、一九九二。
- (33) 『伊犁總統事略』『西陲總統事略』とする版もありに附刊されている。十四頁。先の拙論では、説明と引用が不正確であったので、ここに訂正する。
- (34) 同右、十五頁上。『欽定外藩蒙古回部王公表傳』卷四十七、十二頁。宮脇、一九七九、一二九頁。
- (35) BAWDEN, pp.10, 45-46.
- (36) CWJP, pp.138-139.
- (37) LWJ, pp.127-133.
- (38) 岡、一九八八。
- (39) 森川、一九七九、七八頁は、ズラートキンの論文に拠って、エリンチンドルジは乾隆帝の怒りをかい、弟ジエブツンタンバニ世とトシェート・ハーンの目の前で斬刑に処せられたという。しかし、『王公表傳』卷四十七、十一頁下には「但念乃祖乃父、夙著勤勞、朕尚不忍加以顯戮、着賜令自盡」とあり、自殺を許されたのである。
- (40) 森川、一九七九。森川、一九八五、四、八頁。
- (41) 森川、一九八五。
- (42) 同右、二八―二九頁。
- (43) 現在のウラーンバートルの前身であるイフ・フレール Yekhe khuriy-e は、モンゴル年代記『エルテニイン・エリ

シエブツンタンバニ世伝説の成立 宮脇

- 』(Galдан, pp.110-138)によると、一七七八年まで移動を続けており、固定都市ではなかった(柳澤、一九八六参照)。フレールの本来の意味は囲い、または囲われた円い空間のことで、これから派生してキャンプ(陣営)や移動僧院を指すようになった(宮脇、一九八六)。イフ・フレールは、固定寺廟のリウオゲギェリン(ガンダン寺)のことではなく、シエブツンタンバの教団組織である大移動僧院を指す名称であった。これは、モンゴル帝国時代のハーンのオルドと都市の関係と似ている。ダー(大)・フレールも同義。ウルガはゲル(天幕)の敬称オルゴー(örge)のロシア語訛りで、庫倫はフレールの満洲語形 kuren の音訳。
- (44) 岡、一九九二。
- (45) SÄRKÖZI, pp.105, 110.
- 〔付記〕 本稿は、一九八九年成田で開催された第五回国際チベット学会での発表「Tibeto-Mongol relations at the time of the First Rje btsun dam pa Qutuytu」に基づき、大幅に加筆したものである。